

《熊本県立旧制中学校 濟々覺と教育者 荒木俊馬の源流》

濟々覺は、教育県と言われて来た熊本で最も古い歴史をもつ中学校（旧制。現在は県立の高等学校）である。創立以来終始一貫かわらない建学精神は『三綱領』であり、徳・体・知、三育併進で教育の理想実現に邁進し、さらに、国際化時代にふさわしい人材を培い濟々たる多士の育成をめざし、実に 130 年の歴史を刻んでいる。

荒木俊馬は、明治 43（1910）年、熊本県立中学濟々覺へ進学、殊に「徳体知」の三育併進を建学の精神に掲げた濟々覺において、のちの教育者たる人格が潜在的に育まれ、京都産業大学の創設にあたっての建学の理念にも大きな影響を与えた。

大正 9（1920）年、京都帝国大学理学部に入学、当時最先端の科学であった宇宙物理学を志す。大正 12（1923）年、京都帝国大学卒業とともに同大学理学部講師に就任、助教授、教授と昇進を続けた。この間、欧州留学を経験し理学博士の学位を取得するなど、気鋭の天文学者として研究活動や後進の指導に邁進、教え子から湯川秀樹博士、朝永振一郎博士などノーベル賞受賞学者を輩出した。

教育者 荒木俊馬の源流は、まさに、ここ熊本、来民の地に求められる。

〈京都産業大学「建学の精神」創設者 荒木俊馬〉

いかなる国家社会においても、大学は最高の研究・教育の機関である。大学の使命は、将来の社会を担って立つ人材の育成にある。

その教育の目標は、高い人格をもち、人倫の道をふみはずすことなく、社会的義務を立派に果たし得る人をつくることであり、しかもその職域が国内であろうと海外であろうと、その如何を問わず、全世界の人々から尊敬される日本人として、全人類の平和と幸福のために寄与する精神をもった人間を育成することである。

このような人間は、日本古来の美しい道徳的伝統を精神的基盤とし、東西両洋の豊かな文化教養を身につけ、絶えず変動する国内情勢に関して十分な知識をもち、その科学的分析によって正しい情勢判断のできる能力を備え、如何なる時局に当面しても、常に独自の見解を堅持し自己の信念を貫き得る人間である。

かかる学生の育成が、本学の建学の精神である。